

現地報告

ロシアの博士課程の制度についての報告—口頭試問関連の手続きを中心に—

О российской аспирантуре, в особенности о процедуре защиты, на примере РГПУ им. Герцена

キーワード： ロシアの博士課程, 前試問, 本試問, カンディダート学位, コロナウイルス

Keywords: Российская аспирантура, предзащита, защита, степень кандидата наук, коронавирус

齋須 直人 SAISU, Naohito
学振特別研究員 (早稲田大学)

目次

1. 学位論文提出までの流れ

1-1. 日本の博士課程との比較

1-2. 入学するまで

1-3. 入学後

1-4. 学位論文提出条件

1-5. 前試問

1-6. 前試問後のインターバル

2. 試問手続き

2-1. 1 回目の会議

2-2. 2 回目の会議

2-3. 試問一週間前手続き

2-4. 試問

2-5. 試問後の書類

2-6. 学位記の発行

3. ロシアでの学位取得のメリットとデメリット (日本の大学院・学位との比較)

3-1. メリット

3-2. デメリット

4. おわりに

余録 . 試問のための滞在期間でのコロナウイルスの状況

私は2021年4月に、サンクト・ペテルブルクにある、ゲルツェン記念ロシア国立教育大学(写真1:ゲルツェン大学のメインキャンパスにある、教育学者ウシンスキー像, 写真2:ゲルツェン大学のメインの建物内, 写真3:大学内のアレクサンドル・ゲルツェン像)¹(Российский государственный педагогический университет им. А. И. Герцена, 略称はРГПУ)の文献学部ロシア文学科²で、ドストエフスキーをテーマとしたカンディダート学位論文(後述のように日本の課程博士論文に相当)の試問を終えた。本稿では、ロシアの大学院における試問の書類手続きについて、自分の体験を中心に記したい。ロシアの大学院やロシア留学, ロシアの大学制度に関心を持っている人には参考になることもあると思われる。また, 別の国の海外留学と比較することも可能かもしれない。本稿から, ロシアでしばしば生じる問題についても多少イメージすることができるので, ロシアでの生活に興味がある人の参考になる部分もあるかもしれない。



写真1



写真2



写真3

1 大学サイト(ロシア語, 英語, 中国語がある): Российский государственный педагогический университет им. А. И. Герцена ([herzen.spb.ru](http:// Herzen.spb.ru))。

2 学科サイト: Кафедра русской литературы РГПУ им. А.И.Герцена (<https://sites.google.com/site/kafruslitrgpuherzena/home?authuser=1>)。

現段階で、これまでロシアでカンディダートの学位を取得した日本人は少なくはない。ロシア文化を専門とする日本人であれば、少なくとも10人はいるだろう。しかし、日本語で得られるロシアの博士課程についての情報は多くはない。学部留学とは異なり、まとまった文字情報は見たことがない。ロシア語で大学院制度全般を説明するサイトはあるものの、各大学の制度はそれぞれ大きく異なる。サイトについては、いくつか調べたものの特別に勧めることができるものがないのでリンク等は掲載しないが、検討している人は、検索して出てくるものはざっとでも見比べてみるといいかもしれない。ロシア人であっても、大学の公開情報と口コミ情報を組み合わせて個々の課題を達成し、次のステップへ進むというやり方を取っている。全ての大学に独自のルールがあり、それが絶えず変化すると認識しておいた方がよい。この記録は、あくまで私が体験した一例に過ぎないし、伝聞で得たものの裏を取れない情報もある。個々のケースで状況は大きく変わってくるということは念頭に置いて頂きたい。また、様々な事情で文字に残せない情報も少なくなく、経験者との直接的なやり取りで情報を得ることの重要性はいつまでもなくなっていくかもしれない。

ゲルツェン大学の手続きはいくつかの大学について聞いた話と比べても多いようだが、それでもどの程度のものかは分からない。全て体験した今であるからこそ、タスクの全貌が見えているが、毎回、何かが必要になる度に通知され、それぞれのタスクを終える期限がタイトに定まっていた。唐突に大量の書類作業が降ってくることは、他の仕事にも悪影響を及ぼした。様々な人の助けがないと完遂できないし、重要人物（指導教官、討論者、書記など）の誰かが悪意を持った人物だった場合、最後までことを運ぶのは困難だろう。

最初に、学位論文提出までの流れ、それから、試問の手続きについて、そして、ロシアでの学位取得のメリットとデメリットについて紹介する。最後に、渡航した時期のロシアにおけるコロナウイルスの状況についても書く。大学院在学中の手続きの多さについても、ここから察することができると思うが、その中でもやはり試問手続きは他と比較できないほど煩瑣であった。

入学前から学位取得までの間、ビザ・滞在登録関係や、大学の事務関係の手続きにかかる時間と、学位論文を書くためにかかる時間に大差ないことすらあり得る。それほどに事務手続きは多い。

3 確認できたものとしては、次のものがある。鳥山祐介「ロシア国立人文大学大学院（モスクワ）における留学体験報告」『日本ロシア文学会関東支部報』、23号、2005年、23-27頁 (<http://yaar.jp/robun/kanto/toriyama.pdf>)。2005年に書かれたものであるが、現在読んでも参考になる。特に、日露での研究の作法の相違についての記述には、ロシアに限定されない、海外大学院留学の利点が分かりやすく示されている。この体験記の書かれた当時からの大きな変化としては、現在においては、多くの学会の情報等はインターネットで掲示されていて特に仲介者を必要とせずに参加できるなど、研究者コミュニティが以前よりははるかに開かれたものになっているということが挙げられる。

1. 学位論文提出までの流れ

1-1. 日本の博士号との比較

修士課程の上の博士課程に相当するものは、ロシアの場合は аспирантура (アスピラントウーラ) と呼ばれ、課程の年数は同じく3年間である。取得できる学位は, кандидат (カンディダート) であり, これまで「準博士号」と訳されてきたものである。これは, 日本の課程博士や Ph.D に相当し, Ph.D と記載することも可能である。カンディダートが準博士号と訳されるという呼称の問題は, 日本の博士号よりも下の学位と誤解される原因の一つになってきたと考えられる。さらに, カンディダート学位の後に取得できる上の学位として доктор (ドクトル) があり, こちらは, そのまま訳せば「博士号」となるのでややこしい。必要とされる業績は, 日本の制度で言えば昔の論文博士に相当し, 経験を積んだベテランの研究者が取得できるものである。Докторантура (ドクトル課程) という言葉はあるが, これは通常課程という言葉でイメージするようなものとは異なり, 授業等を受けたりする教育プログラムがあるわけではなく, 論文提出の条件があるのみである。ただし, このドクトルも, 相当に優秀であれば30代で取れるようになってきており, 余計にややこしい。もし日本でも, 課程博士の後にさらに上の学位として論文博士を取ることができるという制度があれば, 優秀であれば30代で取得する人がいてもおかしくないだろう。

ユネスコの公式文書 Revision of the International Standard Classification of Education (ISCED)(2011) において, ISCED (国際標準教育分類) の「Level 8: Doctoral or equivalent level」についての記述で, この Level 8 については様々な名称があることが記載されている。この文書のロシア語版の該当箇所 58 頁において, 「кандидат наук (PhD)」と表記されている⁴。また, ロシアはボローニャ・プロセス (各国毎に異なる学位認定に互換性を持たせるために実施されている合意) に加盟しており, このことについて記載した文書の 37 頁でも, 「学士—修士—博士」の3つの段階の中で, ロシアで3つ目に属するのは кандидат と доктор の二つがあるということが記載されている。また, 同じ頁にはカンディダート学位とフランスの博士とが同等のものであるという条約があるという記載もある⁵。以上からも, カンディダート学位が欧州の Ph.D と同等のものであることは間違いないと思われる。また, カンディダート学位は, 今は少なくとも日本においても制度上では Ph.D 扱いになるので (学振 PD の申請資格など), 一律に機械的に評価される場では同等扱いになる。ロシアの学問の制度を少しでも知っている人がいるという場ではともかく, いない場では Ph.D と説明すればそのまま通用する。日本の博士号の代わりにロシアのカンディダートを取得して, 何かしらの不利益を被る可能性として一番あり得るのは, 日本の大学等のロシア関係者がカンディダート学位に偏見を持っているパターンと考えられるが, これもすでに少ないのではないか。日本では, 世代が上になるほど, カンディダート学位を修士号と同等のものと認識してい

4 https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000211619_rus .

5 http://erasmusplusinrussia.ru/PDF/BolonProcess/Bolon_Process.pdf .

る人が多いように思える。詳しくは確認できていないが、この学位の重みが時代ごとに異なっていた可能性もあるかもしれない。経緯を調べることはできていないが、ロシア語学習者やロシア語を使う日本人が必ず使うと思われる『研究社露和辞典』(1988)の кандидат の項目の訳語には、「修士」があげられているが、『プログレッシブ露和辞典』(2015)では「準博士」があげられている。他の海外文学研究については、英米文学、フランス文学、ドイツ文学と、海外学位は当たり前かつ、国内学位よりも評価される傾向すらあると思われる。ロシアについては今ではカンディダート学位取得者の日本人も少なくはないが、他のヨーロッパの海外文学研究の場合よりもはるかに少ないし、それらと比べるとカンディダート学位は評価されていないかもしれない。ロシアの学位のハードルが他のヨーロッパ各国のものより低いというわけではないのもあり、後で記すように、ロシアの博士課程で学ぶメリットが大きいのもあり(当然デメリットもあるが)、他の国の場合と同程度に評価される流れを作る方が業界全体にとっても益が大きいであろう。ただ、取得してさほど時間が経っていないのでまだ何とも言い難いが、現段階でロシアの学位であることで、日本の学位と比べて私が不利益を被ったと感じたことはない。

ロシアの学位制度がヨーロッパ等の他国と異なることで、互換性の問題でロシア人も不利益を被ることがあるらしい。そのため、ロシア人は自国の学位について自嘲気味に語るが多く、外国人がロシアで学位を取得しようとするのは物好きであるように見なされることもある。在学中は、日本でどの程度評価してもらえるのかについて不安があっただけでなく、この点でも、取得することに本当に価値があるのかと疑問に感じ、心理的な負荷がかかった。本稿では述べないが、ロシアには5年制の学部と修士課程が合わさった制度 специалитет (スペツィアリテート)が存在し、その制度で卒業するとそのまま博士課程に進学可能である。また、6年制の芸術大学があったり、асистентура-стажировка (アシステントウーラ・スタジローフカ)という修士課程でも博士課程でもない芸術系の課程があったりと珍しい制度がある。互換性の問題でロシアの学位が不利益を被るのは差別に近いと思うので、これも是正されていくことを願っている。

1-2. 入学するまで

ロシアでは、国立大学も含め、学費は大学ごとに大きく異なる。ゲルツェン大学はペテルブルク大学や科学アカデミーロシア文学研究所(プーシキンスキー・ドーム)の博士課程よりは安かったと思うが、2014年度は留学生は年間18万ルーブルだったと記憶している(ロシア人の3倍程度か)。払った当時の1ルーブルは2.5円程度だった。

第一の入学の条件として、学科長と、指導教官になる人の許可をもらう必要がある。私の場合、

6 課程など、制度面を扱っているものではないが、ロシアの珍しい大学システムについては、次のような留学体験を記した書籍から知ることができる。例えば、ロシア国立ゴーリキー文学大学で学んだ体験を中心に書かれた次のエッセイがある。奈倉有里『夕暮れに夜明けの歌を一文学を探しにロシアに行くー』(イースト・プレス)、2021年。また、ロシア国立モスクワ音楽院への留学の体験を書いた次のものがある。坂本里沙子『私の音楽留学』(ユーラシア文庫)、2020年。

その段階でロシアに住んでいたため、許可を得るために何度か大学に足を運んだ。それまで一度だけ行ったロシアでの学会発表の原稿を見せたところ、学科長の許可は出た。指導教官となったナデージダ・ミフノヴェッツさんはドストエフスキー研究者だが、その娘マリアさんもドストエフスキー研究者で、ペテルブルクのドストエフスキー博物館の職員であり、マリアさんとはドストエフスキーが執筆をした保養地でスターラヤ・ルッサの毎年行われる学会で知り合った。ドストエフスキーの家博物館で当時の人々になり切りながらマズルカやカドリールを踊るという学会のイベントで、マリアさんと踊った（主催者の要求を断れなかった）。入学できる大学院を探していた際、マリアさんがゲルツェン大学卒ということ思い出したので、ゲルツェン大学にはドストエフスキー研究者はいますか？とメッセージで尋ねたところ、「私の母です」との答えが返ってきた。この時点で初めてミフノヴェッツさんを知った。そこで早速ミフノヴェッツさんに、ロシア版 Facebook である VK という SNS で長文でお願いのメッセージを送ったところ、Да（はい）と一言だけ返事がきた。これで指導教官の許可も得た。そもそも、いきなり SNS のメッセージでこの内容のお願いをするのは失礼かもしれないが、当時は慌てていて、そこまで考えが及ばなかった。学科長は、ドストエフスキーの先行研究は読み切れないほど多いがやれるか？ミフノヴェッツさんについて、требовательная женщина（要求の多い女性）だが、やれるか？と私に尋ね、少し怖かったがやれると答えた。ゲルツェン大学のロシア文学科が伝統ある学科であり、毎年のようにドストエフスキーを研究する大学院生が現われ、その中から優秀なドストエフスキー研究者を多く輩出しているということは、この時点では知らなかった。

次の条件は、事務手続きを経たのちの入学試験であり、「専門」「外国語」「哲学」の3つが課される。留学生の場合は「外国語」としてロシア語が課される。どれも、билет（くじ状の試験問題紙。ロシアの学校や大学における一般的な試験方式）を引いて、出てきた問いに答えるというものだった。試験は留学生をひとまとめにして行ったが、私以外は、1人韓国人の女性（入学後、1年と少しでいなくなった）がいた以外は、全員中国人だった。かつ、ゲルツェン大学は芸術系の学科があるので、絵画や音楽を専門とする人が多かった。中国人たちに聞いたところ、ロシア文学科は他の学科と比べて学位取得が一番難しいらしかった。人数が多いからこそ知ることができる情報だろう。ロシア文学科で修士課程を出た後、よりカンディダート学位が取得しやすい別の学科に移った中国人留学生もいた。仲良くなった絵画専門の、9年間ロシアに住んでいると言っていた中国人は、ロシア人のようにロシア語が話せたが、学問に興味がないせいか、途中でドロップアウトしてしまった。中国人留学生の場合、ロシア語の会話能力よりも、学位を得て故郷の大学で就職先を得たいという強い意志がある人が最後までやり遂げる印象を持った。

1-3. 入学後

ロシアの大学には、очная（対面）、заочная（通信教育）、очно-заочная（夜間）形式がある。ゲルツェン大学の場合は、留学生は очная форма（対面形式）のみであった。留学生の入学の時期は11月、年度が終わるのが10月であり、ロシア人院生と若干ズレがあるように感じた。

入ってすぐにカンディダート学位請求論文のタイトルを決める（後で修正可）。11月に入学して、1月にはテーマを提出した。私の場合、この短期間で決めないといけないルールも大きく影響してテーマが決まった。

論文指導を受ける以外はいくつかの授業に出る必要がある。ロシア語の授業は1年目に、短期間ながら毎週あったが、さほど難しくなかった。哲学の授業も短期間ながら毎週あった。他にも、セメスターごとに、3種類ほどの授業があったが、どれも3回程度で終わる。覚えているものでは、参考文献の探し方についての授業、論文の文体の習得法についての授業などがあった。これらは留学生の枠で課された授業である。つまり、私と1人の韓国人以外全員中国人のクラスで受けたものであった。中国人留学生は皆人柄もよく親切で、彼らと協力し合って様々な手続き上の課題を乗り切った（担当の国際課の事務のロシア人は中国語を習得しており、ある時期から全員に中国語で連絡してくるようになった）。旧ソ連やヨーロッパ、アフリカからの留学生のクラスは別にあるのだろうか。

学科で課された授業は演習のみである。博士課程の学生同士で発表をして、学生同士で、さらに教員がコメントするというものだった。ロシア文学科は、毎年博士課程には3～4人程度入学するが、最後まで論文を完成させられるのは半数以下かもしれない。他に学科で参加したのは会議であり、毎回呼ばれ、聴いていた。印象に残った議題は、新しい試験方式で入学した学部生にいかに関係するかという問題だった。ロシアで日本の共通一次試験に類する試験が課されるようになってから、如実に議論と文章を書くことが苦手な学生が増えたというのだ。

課程において最も大事なものは、カンディダート試験である。入学試験の科目と同じだが、「外国語」（留学生はロシア語）と「哲学」と「専門」が課される。ロシアの博士課程は、論文執筆に直接関わる以外では、この試験だけがメインイベントと言ってよい。それぞれ、口頭の試験に加え、長文レポートの作成が義務付けられる。この難度は大学により異なるが、準備に長時間費やすことが必要な場合が多い。ゲルツェン大学の留学生は、「外国語」と「哲学」は留学生クラスで取りまとめられて手加減されているので、楽な方と思われる。留学生が少なく小規模のところではロシア人と同等の条件が課されることもある。

また、何コマか所属の学科で授業をする必要があった。私の場合は、通常の教員ですら授業時間が削られている学科であったため、これをさせてもらえず、指導教官の授業の枠内でゲスト講師をするに止まった。毎週授業準備をするとなると負担が大きいので、これには助けられた。

3年の課程を終えるときに、修了試験が課される。ここまでの研究成果を口頭発表し、質問が課されてそれに答える。口頭発表の内容は、後述する автореферат（アフトレフェラート）と同じ形式で書く。この試験に通ると修了となる。つまり、博士課程修了と、学位論文の提出や学位取得とは異なる。日本では単位取得満期退学の段階だが、ロシアの場合はここで修了証が出る。修了証に表記されていたことで知ったが、この段階で得られる資格は、исследователь-преподаватель-исследователь（研究者—教師—研究者??）だ。私の修了証に記載されている表記と、正式名称は若干異なるようで、正式には Исследователь. Преподаватель-исследователь だ。

しく、大学で教えるための資格である⁷。

1-4. 学位論文提出条件

学位論文を提出するためにはいくつかの条件を満たさなければならない。まずは博士課程3年間の所定の年限を終え、修了試験に合格する必要がある。ちなみに、大学院により異なるかもしれないが、大学院に入らなくても指導を受けながら学位論文を仕上げれば、論文を提出することができる制度がある。他にも、途中まで研究生の立場で在籍してから最後の年にいきなり博士課程3年目に上がることもできる場合もあるらしい。

もう一つの条件は、BAK (высшая аттестационная комиссия の略、高等審査委員会)⁸ 公認雑誌リストに載っている雑誌に最低でも3つ、論文を掲載することである(発行される前の採録決定済みの段階でもよい)。私の場合、自分の分野は「ロシア文学」で登録していたので、「ロシア文学」の括りで論文を載せなければ無効であった。これを指導教官も知らず、複数領域で成果を発表しようと「神学」にも出そうとしたことがあったが、途中で気づいた。もしも出していれば数にはカウントさせてもらえない。それどころか、BAK について誰も教えてくれる人がいなかったのので、BAK 公認外の雑誌に1つ載せてしまい、遠回りをした。BAK 公認雑誌リストは膨大で、自分で一度風潰しに確認したことがあるが、それよりも、良い雑誌を複数の知り合いに聞くのが良い。月に1回発行している雑誌もあり便利だが、投稿料は他より高めであることが多い。私が出した雑誌のうち、一つは掲載料が1万ルーブルほどした。印刷されるまで長期間待たされた雑誌には外国人無料のものもあった。同じBAKの雑誌でも難度に大きな差があるので、要件として一律にBAK公認を求められることにどの程度の意味があるのか疑問である。私の場合はそのせいで、載せたかったBAK公認ではないドストエフスキー研究の雑誌に論文を投稿することができなかった。投稿論文は、指導教官がとても丁寧に見てくれて、毎回10回近く詳細なコメント付きの訂正要求があったため、ここでも相当に遠回りしたと思う。これほど仕上げたのなら良い雑誌に、と私は思ったが、指導教官はそこには全くこだわっていなかった。良い雑誌を自力で探し、投稿してみると問題なく掲載してもらえた。BAK公認の雑誌の中で注意が必要なのは、有名大学の紀要で人気があるものは、投稿してから論文が掲載されるまでに時間がかかることがあるということである。これは、課程の3年間で学位論文を完成させたい人にとっては特に気をつけた方がよい。半年や1年、場合によってはそれ以上待たされる雑誌もある。そのため、こういった雑誌に投稿する場合は、学年の早い段階にした方がよい。年に12回出しているような雑誌は査読も早いので、時間がない場合は特にこうした雑誌に投稿するとよい。採録決定済みでも良いので、数か月に一度発行の雑誌でも、査読がすぐに行われるのであれば投稿してもよいだろう。

BAK 公認論文に加え、スコーパスやウェブオブサイエンスという、理系分野では有名なイン

7 次を参照。https://disszakaz.ru/dissertantam/kandidat-nauk/diplom-ob-okonchanii-aspirantury-bez-zashchity-dissertatsii/

8 BAK のサイト : minobrnauki.gov.ru。

デックスに登録された雑誌に1つ論文を載せることを要求する大学もある。これはここ3年くらいで出てきた傾向である。私の場合、その要求はされてなかったが、ウェブオブサイエンスに登録されている雑誌には論文を2つ載せることになった。ちなみに、一度ロシアのある大学で日本語教師として非常勤講師をしようとしていたとき、これらの雑誌に論文を載せたことがあるか聞かれた。載せていればわずかに給料が上がるらしい。

以上を満たしたうえで、指導教官の許可が必要になる。ここ15年くらいで学位提出の要件は徐々に難化している。私の印象では、上記のBAK公認雑誌リスト論文提出だけでも、多くの日本の大学の条件よりも厳しいように思える。当然ながら、日本人にとっては外国語で書くのでさらにハードルは上がる。しかし、日本の大学でも、昔ながらの制度を保って博士論文提出のハードルが高い場合もあるかもしれない。その場合は日本で取得する方が難しいだろう。中国人留学生からは、中国の大学の博士課程もそのように難度が高いと聞いた。

要件には含まれていないが、学会発表は年に数回やる人が多く、学会の数は多く頻度も高い。学会参加についても、後に述べるアフトレフェラートに記載するので、これが評価に関わるかどうかはともかく、数回は学会発表をしておくとも良いかもしれない。

1-5. 前試問

試問の前に学科で行われる前試問がある。学位論文への評価書を2人の研究者に書いてもらい、学科の会議で評価書を書いた研究者と会場からの質問に答える。口頭と書面の両方で答える必要がある。ここで学科の教員たちの賛同を得ると次のステップに進める。前試問に通っても、加筆や修正をするように要求されることが多い。私の場合は修正ゼロの出来として評価されたため、この段階でほとんど学位取得が決定した。例外的に本試問で落とされることもあるが、実質的な可否の決定はここで行われ、残りはひたすら手続きと言えよう。本当は、修正要求ゼロの段階まで仕上げずに可能な範囲で前試問を早めに行って突破し、その後に修正した方が時間の短縮になると思う。前試問と本試問の間にインターバルがあるからである。

私の場合、2020年3月上旬に論文を文献学部ロシア文学科に提出の後、コロナウイルスの影響で大学が閉まる恐れがあったため、学科の協力により、提出一週間後という異例の早さで行われた。実際に直後に大学が閉まった。この協力がなければ前試問の通過が一年近く後になっていただろう。評価書を書いたのは、ロシア文学と正教の関係を研究しているゲルツェン大学とフィラレート大学で働くバラクシナさん、『白痴』やストラハーホフを特に研究しているペテルブルク大学のトイチキナさんである。2人とも、学位論文をA4で印刷することを求めたので、印刷して手渡した。バラクシナさんは、印刷した論文に様々な書き込みをしてくれた。トイチキナさんは、忙しいのに自宅に招いてくれ、1時間半にわたって細かいコメントをくれた。

前試問通過後の書類としては、1) 前試問の経過を記載する書類がある。評価者や会場の参加者から何を質問・コメントされ、何を答えたのかを詳細に書く。評価者たちのコメントに丁寧に答える文を作成しようとする私に対し、指導教官はほとんど論破するような内容に書き替えてい

た。おそらく、学位論文の質の高さを示すためであろう。これに加えて、2) 前試問の結果や研究内容、経歴等を書いた書類を大学の大学院課に提出する(何度もお役所的な訂正を経たのち)。3) その他、指導教官、試問の議長と *ученый секретарь* (書記) によるサインの必要な多数の書類を提出する。書記は学位請求者たちの全ての書類のやり取りを受け持つので、書記が優秀であるかどうか、協力的であるかどうか試問手続きで最も重要な要素となる。

1-6. 前試問後のインターバル

前試問の後、ゲルツェン記念ロシア国立教育大学の場合は2回の審査会議の後試問が可能となる。この回数のことを何人かの知り合いに聞いたところ、知り合いたちの大学よりも回数が多いと言われた。私の場合、コロナウイルスが広まったため、前試問後すぐに日露間の国際線が停止し、大学の事務も一時期動かなくなり、試問委員会も活動しなくなってしまった。帰国便も国際線が止まる前日であった。そのせいで前試問後に試問のために学位論文を提出できたのは論文提出から半年後の2020年11月上旬であった。

2. 試問手続き

私の場合、試問のためにロシアに滞在した期間は2021年2月13日～5月6日だった。帰国は5月9日の予定だったが、戦勝記念日(ファシズムに勝利した日として大々的に祝う)と関係してか、急にアエロフロートの飛行機が飛ばなくなり、6日に変更することになった。渡航のための目的には資料収集も含まれていたが、こちらの目的のみ所属先での研究費を使用することができた。所属大学では海外渡航を基本的に禁じていたため、コロナの状況下でも渡航が必要であることを示すために大学に渡航申請書を提出した。非常勤先の日本の大学の授業は対面がメインとなっていたが、事情を説明しオンラインで行う許可を頂き、4月はロシアから日本にオンラインで授業をしながらの滞在だった。別の非常勤先はこのとき対面必須だったが、コロナウイルスの影響で春学期には開講しなくなったので渡航できた。その後も綱渡りが続くことになる。

ちなみに、今回の手続きは、対面で行う必要があるものだけだと、最低でも5カ月はペテルブルクにいる必要があった。これは他大学の話を聞いてもどう考えても長い。しかし、試問のために大学が出してくれるビザは最大で3カ月であり、最初から無理な要求が課されている。書類手続きには代理人が必須だが、しばらく掛け合ってやっと代理人に頼むことが可能であると判明した。

コロナウイルスが広がってから、各国の大学で試問をオンラインで行えるようになったにもかかわらず、ロシアでは事務手続き制度の保守性のせいか、今に至るまでオンラインでの試問を認めた事例は少ない。そのせいで、私と同じ立場にいた中国人留学生は、中国との国境が開かないため、試問が行われないうまま待たされ続けている。中国とは異なり、日本との国境が半年で開いたのは運が良かった。

2-1. 1 回目の会議

提出書類は、まず、1) 学位論文があり、その PDF は大学の試問専用サイトに掲載される。さらに、2) 指導教官による評価書がサイトに掲載される（写真 4、5：学位論文審査に関する大学のサイトの掲示）。3) その他、指導教官、試問の議長と書記によるサインの必要な多数の書類を提出する。学位論文の提出の際は、データだけではなく、印刷して製本し大学院課に 1 つ提出する。私の場合、行われたのは 2020 年 12 月下旬であり、書類提出は代理人にお願いした。様々な書類のうち、手書きの書類 2 枚が理不尽であった。手書きというだけでも理不尽であり、わずかでも間違えると書き直しである。日本から DHL という国際宅配便を使って郵送した（7000 円）。

この 1 回目の会議が終わってから 2 回目の会議が行われるまで 1 カ月半～2 カ月ほどのインターバルを置く必要がある。

Объявление о защите диссертации:
 Дата заседания совета диссертации: 21.12.2020
 Информация о соискателе:
 Тип диссертации: Кандидатская
 Фамилия, имя, отчество соискателя: Савсу Наохито
 Наименование диссертации: Образ наставника в творчестве Ф. М. Достоевского конца 1860-х — начала 1870-х гг.; св. Тихон Задонский, К. Е. Гусев
 Информационный код диссертации: 10.01.01 - Русская литература
 Область науки: Филологические науки
 Номер диссертационного совета: Д.212.199.32
 Научный руководитель (консультант):
 Фамилия, имя, отчество: Михайлов Николай Геннадьевич
 Организация, должность: Российский государственный педагогический университет им. А. Н. Герцена, профессор кафедры русской литературы
 Ученая степень: Доктор филологических наук
 Ученая звание: Доктор
 Откуда: Оттуда
 1. Заседание совета о принятии к рассмотрению и назначении экспертной комиссии:
 Дата заседания: 24.12.2020
 Состав экспертной комиссии: Лямина Лариса Евгеньевна, доктор филологических наук, профессор; Азамова Наталья Николаевна, доктор филологических наук, доцент; Пonomarev Евгений Русланович, доктор филологических наук, доцент.
 Протокол: Протокол 1 совета
 2. Заседание совета по прочту диссертации к защите:
 Дата заседания: 18.02.2021
 Решение о прочте: Принята
 Протокол: Протокол 2 совета
 Заключение экспертной комиссии: Заключение
 Высшая организация: Национальный исследовательский Томский государственный университет
 Адрес: 634050, г. Томск, пр. Ленина, 36.
 Телефон: (3822) 529 585
 E-mail: gector@tom.ru
 Оponentы:

写真 4

Ученая степень: Герцена, профессор кафедры русской литературы
 Ученая звание: Доктор филологических наук
 Откуда: Оттуда
 1. Заседание совета о принятии к рассмотрению и назначении экспертной комиссии:
 Дата заседания: 24.12.2020
 Состав экспертной комиссии: Лямина Лариса Евгеньевна, доктор филологических наук, профессор; Азамова Наталья Николаевна, доктор филологических наук, доцент; Пonomarev Евгений Русланович, доктор филологических наук, доцент.
 Протокол: Протокол 1 совета
 2. Заседание совета по прочту диссертации к защите:
 Дата заседания: 18.02.2021
 Решение о прочте: Принята
 Протокол: Протокол 2 совета
 Заключение экспертной комиссии: Заключение
 Высшая организация: Национальный исследовательский Томский государственный университет
 Адрес: 634050, г. Томск, пр. Ленина, 36.
 Телефон: (3822) 529 585
 E-mail: gector@tom.ru
 Оponentы:

Фамилия, имя, отчество	Организация, должность	Степень	Звание	Согласен	Отказ
Тимофеев Борис Николаевич	Директор-исполнительный директор Ф. М. Достоевского, заместитель директора по научной работе	Доктор филологических наук	Доктор	Согласен	Отказ
Кардышев Татьяна Сергеевна	Московский государственный университет имени кафедры русской литературы	Кандидат филологических наук		Согласен	Отказ

 Отказы, поступившие на диссертацию и автореферат:
 Откуда:
 3. Заседание совета по защите диссертации:
 Результаты защиты: Решением совета от 29.04.2021 г. (за - 15, против - нет, действительных - нет) соискателю присуждена ученая степень КАНДИДАТА наук.
 Заключение диссертационного совета: Заключение совета
 Протокол заседания совета: Протокол 3 совета
 Дата и время заседания: 29.04.2021 15:00
 Место защиты диссертации: 199034, Санкт-Петербург, Васильевский остров, 1 линия, д.52, ауд.47

写真 5

2-2. 2 回目の会議

これが行われたのは私の場合は 2021 年 2 月 18 日だった。これに関する書類手続きは代理人にお願いできる分量ではなく、自分でやることになる。提出書類は、まず 1) アフトレフェラートであり、これもサイトに掲載される。これは、学位論文の要旨のことで、BAK と 15 名の試問の審査員が、本文を読まずにこちらのみを読むという審査の性質上、こちらの方が試問合格にとって重要である可能性もある。約 7 千から 8 千ワード（日本語換算で 3 万 5000 字相当）を書く。試問を行うのは、サイトにアフトレフェラートが掲載されてから 2 カ月以上後でなくてはならない。私の場合、アフトレフェラートを指導教官とやり取りをして推敲した回数は 10 回よりは多い。アフトレフェラートは、形式が厳しく決まっており、それに合わせて書く。2) 学位論文を今度は 2 部印刷して製本し、図書館と大学院課に提出する。

この段階で討論者 2 名（他大学では 3 名のことも）と ведущая организация（名目上は試問を

主導する機関)を決定する。それまでに予め指導教官と相談して決めるが、この段階で最終決定となる。試問主導機関には学位論文のテーマと関係のある研究を行っている研究者のいる大学が選ばれる。しかし、これは実際は討論者の書くものに匹敵する評価書一つ分を送ってもらうのみで形骸化している。試問主導機関が用意する評価書はお願いした研究者が書いてくれるが、大学の学長が発行したという形式をとる。3) 学位論文に対する評価書をこの3者からもらい、提出する。全て所属先の印のついた紙の現物2部が必要となっている。これをスキャンして大学のサイトにアップロードする。私の場合、これが所定の期日に間に合わずに試問が延期される危機だったが、討論者と連絡がついてなんとか回避した。討論者は早く書いてくれたのだが、書類のデータが送られてこないまま連絡が途絶えてしまっていた。実物は、討論者が試問会場に来たときに手渡ししてくれる。討論者2人とも、印刷した学位論文を求めたので、印刷して渡した。討論者の一人、チホミーロフさんはペテルブルクのドストエフスキー博物館の副館長であるため、博物館に持っていった。もう1人のカルパチョーヴァさんはモスクワ在住なので、モスクワのコピーセンターにメールでデータを送り、印刷と宅急便での郵送を依頼し、無事にカルパチョーヴァさんの手元に届いた。

4) アフトレフェラートを各地へ送付する。アフトレフェラートは最低100部印刷することが義務付けられ、そのうちの半数程度を、大学によって定められた機関や学位論文に関連するテーマを研究している研究者たちに郵送する。印刷は, типография (冊子状にして発行部数や発行した日時や場所を記載したもの) でなければならない。印刷代は1万ルーブルかかった(写真6: 鞆に入ったアフトレフェラート100冊, 写真7: アフトレフェラートに記載必須の印刷日, 場所, 部数等)。これら送付用アフトレフェラート50部近くには, 学位請求者と書記のサインが必要である。送付相手に連絡をして許可を取り, 彼らの所属先の正式名称や住所などを調べて送付用リストに記載していくのも大変時間がかかる。送付先は, 個人だけでなく, 主要な大学や国立図書館なども含まれる。驚いたのは, 大学内にこの各地に郵送物を送付する рассылка (方々への送付) のための専用の部屋があることで, 担当の人に送り先表とアフトレフェラートを渡すと, 残りはやってくれるという仕組みだった。全部で郵送費は3000ルーブル程度だった。書記にペテルブルク内の大学は手渡しで渡しに行くことを勧められ, 同じ日程で試問を受けることになったノヴゴロド在住のオーバー・ドクターの分も含め, 徒歩で3つの大学を巡り, 届けに行った。私の感覚では, お金も大してかからないので郵送した方が良いのだが, ロシアではこのくらいの儉約も当たり前である。ノヴゴロドの学位請求者は, ノヴゴロド大学で学位論文を書き上げ, ゲルツェン大学で試問を受けた。手続きは大変だが, 他の大学や研究機関で試問を受けることも可能となっている。

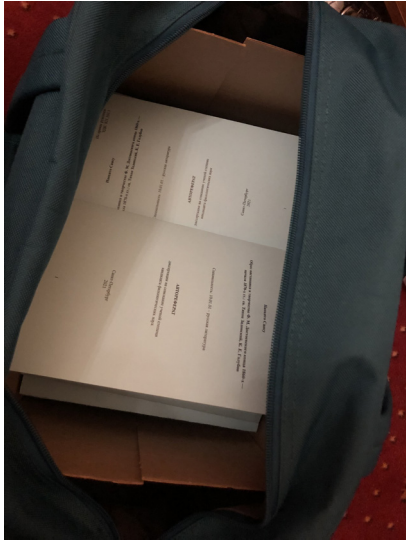


写真6

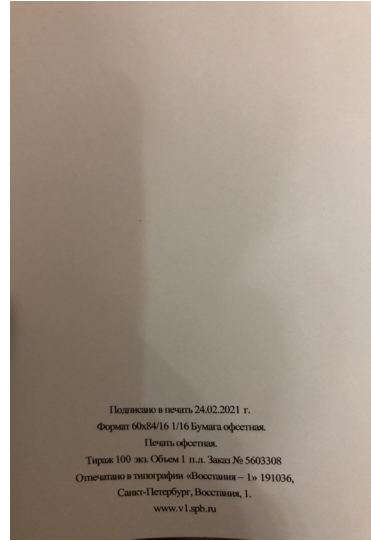


写真7

アフトレフェラートに対する評価書を書いてくれる研究者を4～6人探して願います。皆忙しいので断られることが多いらしい。指導教官が代わりに探してくれるのが普通と聞いたこともあるが、私の場合は自分で探した。学会などにあまり参加しない知り合いの少ない人は、知り合いでもない相手をお願いのメールを送ることになってより一層断られやすいが、挫けてはならない。この5)評価書も、試問の2週間前までに全て所属先の印のついた紙の現物2部が必要であり、これをスキャンして大学のサイトにアップロードする。アフトレフェラートに対する評価書は、多い方が学位論文に箔がつくようだ。そのため、多くの人に評価書を頼む学位請求者も少なくない。私の場合、他の研究者たちの時間をできるだけ取りたくなかったので、最小の数で済まそうと思っていた。最低でも3人からもらわないといけないということだったので、イレギュラーを想定し、保険をかけて4人をお願いした。結局、4人全員から評価書をもらうことができた。さらに、驚いたことに、バシキール大学のボリーソヴァさんは、こちらからお願いしてもいないのに、それどころか何の連絡も取っていないのに評価書を書いて、速達で送って下さった。そのため、結局、アフトレフェラートに対する評価書は5通用意されることとなった。ペテルブルク大学のポボレイキナさんをお願いした評価書は、ポボレイキナさん宅に受け取りに行き（ご飯やお酒をご馳走してもらい）、自分でペテルブルク大学の事務に印をもらいに行った。他は、一度学会に参加してお世話になったバルナウル大学のサフローノヴァさんで、サフローノヴァさんも、自分のドクトル号の試問で忙しかったのに書いてくれた。他は、ヤロスラヴリ大学のフォードロワさんと、モスクワのドストエフスキー博物館のゾロチコさんである。以上のアフトレフェラート送付先や、アフトレフェラートへの評価書を書いてくれる人探しは重要なので、指導教官と綿密に話し合っ決めて。

6) その他、指導教官、試問の議長と書記、試問の審査員によるサインの必要な多数の書類を提出する。サインをもらいに審査員の働く大学まで行ったこともあった。さらに、7) 学部の成績と卒業証明書、修士課程の成績と修了証明書を、アポストイーユ認証と翻訳付きで提出しなければならない。私の場合、持っていったのは、アポストイーユなしの英語の証明書のみだった。大学院課で見せたところ、「なぜ英語なのか？ロシア語に訳すように」と言われた。幸運にも、かつて国際課に提出していたこれらの書類には予備のものがあったので、国際課で頼みこんで拝借した。国際課の事務の人に親切にしてもらったこの瞬間、今までこの人に何度も苦しめられた記憶が、あたかも良い思い出のように、走馬燈のように思い出された。これがなければ、渡航が無駄になっていた可能性が高い。ちなみに、入学当初、この国際課の事務の人に、「寮の部屋には空きがない」と偽の情報を伝えられたために、最初の1年は寮に住めず、コムナルカ（ソ連時代に導入された共同住宅。住人一人一人に部屋があるが、トイレ・シャワー・キッチンが共同）に住むことになったことがある（写真8：1年間住んでいたソ連式コムナルカの外観）。その後は、この人には一時帰国から戻る度にプレゼントを渡して、ご機嫌を取るようになった。



写真8

2-3. 試問一週間前手続き

この時期になると、試問当日の準備をする。指導教官、討論者2名、議長、書記に対してお礼のプレゼントを準備するのが慣例である。私の場合は、メインは高いワインとコニャック、プレゼント用の高価なお菓子などを購入した。相手が女性の場合花束があると望ましい。各相手へのプレゼントでそれぞれ4000ルーブル近くした。プレゼントを用意しなかった場合、一体どうなるのかというのは気になっているが、到底そのような暴挙に出れる雰囲気ではない。

討論者2人は出席必須なため、場合によっては遠い町からくる彼らの交通費と宿泊費は学位請

求者が支払う。大学によっては二人とも出席必須とは限らないらしく、モスクワ在住の討論者のカルパチョーヴァさんはこれを聞いてひどく驚いていた。シベリアのエカテリブルクにある大学の試問の討論者になったときは、全て書面だけで済ませることができたそう。さらに、慣例的に討論者の仕事に対して謝金を支払う（ドクトルには 5000 ルーブル、カンディダートには 3000 ルーブル）。私の場合、1 人はペテルブルクのチホミーロフさん、もう 1 人はモスクワのカルパチョーヴァさんであり、日帰りに来てくれることになったため、サブサン（ロシアの新幹線）往復分の支出のみで済んだ。当日は彼女をモスクワ駅まで迎えに行き、タクシーと一緒に会場に向かった。シベリアなどの遠方から来てもらう場合もあるので、その場合の費用を考えると…。謝金については、書記や多数派の意見では払うのが当たり前で、指導教官は払わない方が良いという考えだった。私も払ったらむしろ失礼に当たらないだろうか？と不安に思っていたが、断られないよう、折り紙に包んでプレゼントの中に入れた。案の定、カルパチョーヴァさんから「謝金はなくても良かった」と連絡があった。数週間後に試問を受けた友人もこれで悩んだらしく、私と同じ葛藤があったようだ。

この段階での提出書類。1) 試問の議長のための台本を書く（型があり、これを自分用に書き換える）。特に厄介なのは 2) 試問の「結論」を報告する書類である。試問よりも前に指導教官と書記に相談しながら何度も推敲を施したのち、試問の場でも議長、書記、試問委員会 15 名、その他の出席者たちのコメントをもらいながら細かいロシア語を推敲することになる。また、3) 試問の際に、1000 ワード程度で学位論文の内容を口頭で説明するための文章を作成し、すでに受け取っている評価書に書かれている質問への回答を全て用意する。他にも、4) 試問で行う投票用紙とそれを入れる封筒を作る。

前日～当日には試問の際の登壇者のための飲料水やバンケットの準備をする。最近は便利で、バンケットセットなるものを注文できる。同じ日に試問を受けたノヴゴロドの人と 8000 ルーブルのセットを注文した（写真 9：試問後のバンケット用のバンケット・セット）。



写真 9

2-4. 試問

私の場合は2021年4月29日に行われた。場所は文献学部のあるキャンパス（写真10：ゲルツェン大学文献学部の入口，写真11：ゲルツェン大学文献学部キャンパスの歴史ある建物，写真12：ゲルツェン大学文献学部の建物の，プーシキンも登ったとされる階段）。2月に行われた試問が対面とオンラインの混合形式だったのに対し（写真13：ベトナム人研究者の試問，対面オンライン混合方式），完全に対面で行われた（写真14：筆者の試問風景）。試問の長さは約1時間～2時間（私の場合，2時間だった）である。全てのプロセスが動画に記録され，速記者にも記録される。一体なぜそこまでするのだろうか？ちなみに，速記者に頼まない大学では，学位請求者が自分で動画から書き起こすらしい。私の場合，速記者には6000ルーブル支払った。動画は同じ日に同じ場所で試問を受けたノヴゴロドの人の友人たちに撮ってもらった。



写真10



写真11



写真12



写真13



写真14

試問の流れは次の通り。

1. 議長が挨拶、試問委員会メンバー15名の名前と学位を読み上げる。その後も、誰かの名前が出る度にフルネームと所属（各大学の正式名称はかなり長い、例えば、ゲルツェン記念ロシア国立教育大学は Федеральное государственное бюджетное образовательное учреждение высшего образования «Российский государственный педагогический университет им. А. И. Герцена»）と学位などを毎回読み上げていた。
2. 学位請求者が研究内容を1000ワードほどで説明する。約10分。
3. 書記によって、アフトレフェラートが読み上げられる（先程書いたように7000～8000ワード）。アフトレフェラートに対する評価書4～6つのうち、請求者に対する質問が記載された箇所だけ読み上げられる。また、試問主導機関からの評価書が全て読み上げられる（私の場合A4で6枚程度）。評価書には質問が含まれている。
4. 請求者は的確に短く一つ一つの質問に答える。
5. 会場からの質問。そのうちの2つ程度は自分で考え、予め誰かにお願いして質問してもらえようように仕込んである。他にも、その場で本当に質問したくなった人からの質問に答える。私の場合は、議長からも唐突に質問され、半分聞いていなかったのが聞き返してしまった。
6. これらの質問に対しても請求者は的確に短く答える。
7. 討論者2人が登壇して評価書を読み上げる。私の場合、チホミーロフさんがA4で9枚、カルパチョーヴァさんがA4で8枚読み上げた。これは多いが、もっと多い例も聞いた。あるモスクワの文学大学の学長は15枚くらい読み上げて、もはや自分の説を述べ始めていたらしい。
8. 討論者2人からの質問や批判に対して、請求者が答える。
9. 会場から質問とコメントがある。ここで大体長話する人が現れる。私のときも、論文の内容から若干離れて現在のドストエフスキー研究の現状を批評する先生がいた。
10. 投票のための休憩を10分挟む。投票箱に試問委員会15名が投票する形式となっている。専

用の投票箱が大学に置いてある。

11. 投票結果が開示され、その後、すぐに試問の「結論」の文章をその場の人々で一字一句検討する。私の場合は賛成 15 票、反対ゼロ票だったので問題なかったが、反対 4 票だった友人はその後さらに議論が続けられたらしい。ちなみに、BAK が 15 票賛成だと怪しむという理由で、1 票くらい反対票を入れた方がいいと思う人がいる。それが運悪く過半評集まって、一生をかけた研究の成果をまとめたドクトル学位論文が、質は優れていたのに落とされた人もいるらしい。その人は、落とされた後 2、3 年で病気にかかって亡くなったそうだ。このことは試問後の懇親会の時間に聞いたが、アネクトドのように語られていたもののどうやら実話らしい。
12. 議長が学位授与が決定した旨を述べる。
13. 請求者からの最後の挨拶の時間がある。ここは録画されないので何を言っても良い。もちろん、述べるのは感謝の言葉である。
14. 議長から最後のまとめの言葉で終了となる。

試問が終わるとお楽しみのバンケットがあり、ワインやコニャックを飲んでお話をする。論文の出来にもよるのかもしれないが、全体として最初からお祝い事の雰囲気だった。通常は落とされないのだから、当然ともいえる。バンケットを用意しているのに落としたり、葬式のような雰囲気懇親することになってしまうだろう。バンケットの際に、もう一人同じ日に試問だったノヴゴロドの女性（間に出産を挟みながらも 5 年で書き上げた）が喜びのあまり感極まって、*всё, моя жизнь закончена*（終わりだ、私の人生は終わった）と涙をにじませながら静かに呟いていたことが一番印象に残ったかもしれない。この言葉は一般的に喜ぶときの言葉として使うものなのだろうか。

2-5. 試問後の書類

翌日には急いで書類作業にかからなければならない。ちなみに、試問の時点で受け取っていないければならなかった、試問主導機関からの評価書（トムスク大学のエレナ・ノヴィコワさんが書いてくれて、速達で送ってくれた）の原本が手元にないことが試問の時点で発覚していたので、翌日はその搜索で潰れた。そもそも、各地から送られてくる評価書の原本は、大学でも私が滞在したホテルでも受け取れず、知り合いを頼る必要があった。ペテルブルクのドストエフスキー博物館に、マリアさん宛で送ってもらい、全て入口のレジのところまで集めてもらっていた。それが、試問主導機関からの評価書だけがどこを探しても見当たらない。副館長のチホミーロフさんと一緒に、館内を搜索した。マリアさんは、結婚したばかりで、新婚旅行にチェチェンへと旅立っておりいなかった。搜索中に、マリアさんからの連絡で、郵便局の不在届が届いていることが発覚した。送り主のノヴィコワさんに電話をして郵便物の追跡をしたところ、レーニン広場近くの郵便局に局留めになっていることが分かった。この日より後は、ロシアでゴールデンウイークが始

まり、それまでに書類を回収しなければ、書類手続きが間に合わなくなり、試問が無効になる。局留めの郵送物は、本来チェチェンにいて不在のマリアさんだけが受け取る資格があるはずであり、状況的には、完全に詰んだと思われた。しかし、郵送物の宛先をマリアさんの職場の博物館にしたことが幸いした。マリアさんの代理人で私が郵送物を受け取らないといけないことになっているという内容で、チホミーロフさんが文書を作成してくれ、館長のアシンバーエヴァさんがそれにサインをしてくれ、博物館の印も押された。それをもって、郵便局に行き、ノヴィコワさんが書いてくれた評価書を回収することができた。この郵便局は分かりにくい場所にある。7年以上前、ロシアに住み始めたときに、実家からの郵送物が局留めされていたのを取りに行った場所だった。そのときは、探すときに1時間半ほど歩き回ってしまったので、場所はよく覚えており、今回は迷わず直行することができた。何となく感慨深い気持ちになった（写真15：郵送物が保管されていた郵便局）。



写真15

最後の書類手続きでまずやらなければならないのは、速記者に、アフトレフェラートその他、試問で読み上げられた文書を送ることである。速記者が数日で速記録を完成させると試問後の大量の書類を準備することになる。この段階で滞在期間を超えてしまうので最後の提出は代理人にお願いした。この書類提出が学位論文関連の書類の中でも最も難関と言われている。この段階でも、すでに提出した書類と、大量の新しい書類の提出が求められる。なぜか試問の動画を含むデータをCDに入れて提出することまで求められる。それまでもPDFのデータでも提出させられる書類は多かったが、今度はこれらにOCR処理をしなければならず、PDFエレメントというアプリをパソコンに入れた（年間契約8000円）。

持っていくと、大学院課で書類の総点検が行われ、細かい部分で直しを要求される。例えば、私の場合、1人の討論者の評価書のタイトルに、「学位論文への」という言葉が足りないので書き足すように言われた。PDFなので、討論者に連絡を取って、ワードデータを書き直してもらい、それをPDFにし直した。他にも細かい修正多数で、提出をお願いした代理人はそのせいで大学

に4度足を運ぶことになった。代理人もドストエフスキー研究者で近い時期に試問があり、私と同時に自分の書類手続きもやっていた。彼には代理でやってもらった1回目の会議と試問後の書類提出のために各5000ルーブルずつとプレゼントも渡した。この額は私にとって大きな出費だが、やってくれた仕事の多さと責任の大きさを考えると、これでも足りなかったかもしれない。

代理人を介して、この手続きが最後まで終わったのは試問から一ヶ月経過した5月末だった。しかし、その後、なぜか前年の12月に出した学位論文の頁数が、その後の会議で2月に出したものと1ページ分ズレていることが発覚し（原因不明）、大問題になった。大学がBAKからペナルティを受ける危機となっていると、噂を聞きつけた指導教官から私に知らされた。その後どうなったのかは未確認である。この件について、ペナルティを受ける可能性がある事務や書記から私に全く連絡がなかったのは、私に何かを言っても状況が変わらないからだと思うが、文句の一つも言いたくなるだろうに随分と割り切っているように思えた。私としても、自分の書類手続きで思わぬ問題が生じていることくらいは知らせて欲しかった。

2-6. 学位記の発行

最後の書類提出後約半年でBAKから学位記が発行される。発行するのが大学ではなくて上位の組織であるBAKであるところが日本との大きな違いだろうか。半年もかかるのは、BAKが提出書類を全て念入りに確認し、不正等がないかを確認するためである。ゲルツェン大学の大学院課が一語一句細かく書類をチェックしていたのは、何かミスがあると大学にもペナルティがあるためだろう。

これだけ時間がかかってさらに半年も待たされるので驚いたが、実は試問の後どころか、大学のサイトに掲載された時点で、学位論文は引用可能というルールになっている。このルールについては、教えてくれた知り合いのロシア人のドストエフスキー研究者すら最近まで知らなかったらしい。

学位記発行の時期が私のその後の計画に大きく関わるため、発行が決定されるまで、多少のプレッシャーを感じていた。学位記が発行されたら大学から連絡があるとのことだったので待っていた。試問から5カ月が経とうという時期の9月下旬になり、知り合いから、BAKのサイトに学位記発行を許可された人の情報が載ると教えてもらった。その日から毎日サイトを確認するようになった。そこで確認すると、ロシアが7月中旬から9月初めまで夏休み期間となり、大学が全く動かなくなるのに合わせて、BAKの学位記発行許可も夏休み期間には止まるということが判明した。結局、10月半ばに学位記発行の許可が出た。これで、学位記の原本を入手するか否かにかかわらず、正式に学位取得者であると名乗ることが可能である。このタイミングでは大学からは何も連絡が来なかった。学位記原本が大学に届くときまで、通常数週間、場合によっては2、3カ月かかる。それまで、大学からは連絡をしてもらえないようだ。BAKのサイトに情報が載ることは関係者はだれも教えてくれなかったが、学位記取得が正式に決定したことを知る時期が数週間や2、3カ月という単位でずれてしまうのは大きい。最後の最後まで口コミベースの情報力

が試されることとなった。

その後、10月下旬から11月上旬にロシアがロックダウンになったため、学位記の発行が遅れ、結局 BAK によって発行されたのは11月末であった。その後、12月16日にペテルブルクのゲルツェン大学の職員が、モスクワにある BAK の施設へ行き学位記を持ち帰り、学長がサインをする。その後ようやく受け取ることが可能である。学位記をどのように日本に郵送するかは考え中である。

3. ロシアでの学位取得のメリットとデメリット（日本の大学院・学位との比較）

3-1. メリット

そもそも、ロシアに長期滞在する方法は限られているため、大学院という3年間の課程は、研究滞在の手段としては良い。ロシアでの生活が楽しめるのであればそれだけでも大きなメリットかもしれない。長い時間を使って資料収集、学会参加などができるため、研究を進める上ではプラスが大きい。会話も鍛えられ、ロシア語での論文執筆の訓練にもなり、語学の訓練としてはメリットが大きいだろう。また、指導教官によってはとても丁寧な指導を受けることができる。私の場合は、初めてまともに論文の書き方を教えてもらった。指導教官は私の指導に相当な時間を割いてくれた。

日本の大学院と両方に在籍している場合は、日本とロシアの大学制度の狭間で得をすることもありえる。例えば、日本では、国内の大学院生向けの給付奨学金は最近充実しそうな動きがあるが、まだ誰でもエントリー可能なものが学振 DC くらいしかない。しかし、海外留学用の奨学金は多数あるので、数打てば当たる戦法で応募し、どこかに採用されれば当面の生活費を得ることができるかもしれない。私の場合は、それで総計4年間分の資金を得たし、この時間稼ぎに助けられた。

意外と学位論文を読んでくれる人は多い。指導教官と、前試問の評価書を書く先生2人、討論者2人と試問主導機関の先生1人とどれだけ最小限にしても5人は通読する。アフトレフェラートのみ読む人は20～30人くらいか。

ドストエフスキー研究に関して言うと、ドストエフスキー研究コミュニティは、日本も大きい方だと思うが、ロシアでは比べ物にならないほど多くの研究者がいる。母数が多いからなのか、優秀な研究者がたくさんおり、行動力次第では、彼らと交流する機会が頻りに持てたり、指導してもらったり、試問に来てもらったりすることになる。研究のインプットのためにはこれ以上得難いものはない。先行研究についての情報も、ドストエフスキーについてはインターネット上にも充実しているとはいえ、特に最初の頃は他の研究者との会話から知ることができる事柄も多く、それがなければ参照必須でありながら今でも知らない文献があってもおかしくない。研究のコミュニティは各国で傾向があると思うが、長期滞在で現地の傾向について知ることができるのも利点であり、比較対象があれば、自分たちの属するコミュニティの傾向を意識することが容易になる。

また、ここまで博士課程の話をしてきたが、修士課程での留学の場合は、日本と入学が半年ズレるデメリットはあるものの、課程の間に論文を出したり学会発表したりすることが必須であるため、修士で業績を出したい人には良いかもしれない。ただし、ロシアの修士課程で取らなければならない授業数が多い。

3-2. デメリット

これまで長期の海外留学者は日本で存在を忘れられがちであった。ロシアからもう戻ってこないと思われてしまうこともあったらしい。今は SNS や様々なオンライン学会があるので、そのデメリットは工夫次第で回避しやすい。

日本の大学院に同時に所属せずにロシアの大学院だけ所属した場合、日本で評価してもらにくい傾向があったり、奨学金にエントリーできなかつたりする。これはこういった立場があまり認知されていないだけでなく、大学業界の縁故主義も関係していると思われる。不公平なのでどうか少しでも是正されて欲しいところである。

日本とロシアの制度の狭間で損をすることもありえる。誰もが直面する問題として、日本とロシアの大学院に所属していると、両方から書類提出を求められる。進捗報告や、研究内容の要約については、日本とロシアの大学院からも、奨学金の支給元からも定期的に求められる。さらに、次の奨学金応募のための書類にも書くので、研究の報告と要約に研究時間が奪われるという本末転倒が起きる。

毎年のようにロシア全体の大学院システムが変わり、ビザや居住環境によるその他のイレギュラーもあって博打要素が大きい。私の場合、丁度3年間の課程を終えるタイミングで規定が変わった。その結果、大学からは3年以上はビザを出してもらえないシステムになり、3年を終えると自分の国で論文の続きを書く必要が生じた。それ以前は、学位論文提出まで研究生の身分でずっとビザが出たと思われる。ただ、書き上げていない状態でロシアに残れなかったのは様々な点で不便だったものの、この制度の変化のおかげで日本の大学院用の資金に繋がったので運が良かった側面もあった。

カンディダートって修士のこと？と同じ人から何度も聞かれることもあった(1-1 参照)。否定的なニュアンスで、日本と研究の手法が違う(!?)と言われることもある。あくまでドストエフスキー研究の話だが、個人的な印象では、ペテルブルクその他の地域では文献学者の場合は先行研究を網羅的に参照した上で、実証性の高い確実な研究が重んじられる。日本では確実な研究をしたところで、So whatの部分で面白いことが言えないと評価されにくい(モスクワでも多少この傾向があるように感じることもあったがもう少し確認が必要)。このように、文学研究においてペテルブルクとモスクワとで実証性に対する姿勢に関する傾向が異なるが、哲学研究ではこの傾向が逆になると聞いたことがある。私としては、印象論の So what なら何とでも言えるということと、研究史というものが存在している以上、一つの単独の論文の中で大きな意味づけを行う必要はないということは強調しておきたい。途中でこの温度差に気づいたため、私の学位論

文の中では、確実な事柄から論を積み上げることと、大きな意味づけを可能な限り両立させようとした。これもまたあくまでドストエフスキー研究の話だが、日本のドストエフスキー研究者はロシアの研究を評価していると感じる。おそらく、ロシア文化研究関連のものであっても、分野によってはロシアにおける研究が進んでいないということもあり得るので、ロシアの研究へ低い評価がなされることがあるとしたら、そうした分野であろう。

4. おわりに

ここまで、試問の手続きを中心にロシアの大学院の制度について述べてきた。留学を開始した段階では、日本の大学での会話の授業以外でロシア語でアウトプットした経験もほとんどなく、ロシア人の知り合いも、ロシアに留学した経験のある知り合いもほぼいなかった。最初は日常的な会話や作文の能力もほぼなかった。それまで留学経験もなく何もかも勝手が分からなかった。滞在登録が何なのかもよく分かっていなかったの、滞在登録で何度か問題を起こした。そのため、博士課程入学についても全く検討していなかった。大学院に入ったのは留学2年目からである。博士課程に入学することになった理由はいくつかあるが、住んでみて、ロシア人と文学を含む様々な話をしているうちに、論文をロシア語で書いて彼らに読んでもらいたくなったというのが大きい。海外での学位取得には様々な動機があり得ると思うが、他の人々の場合も偶然の流れで決まる部分も大きかったのではないだろうか。

入学後も、学位取得に対する決意が固かったわけではない。ロシアと日本の大学院の両方に所属していたので、最後まで学位論文の提出先をロシアにするか日本にするかで迷っていた。イレギュラーな出来事も多かったの、早々に提出先を日本に切り替えようと思ったことが何度もある。これをしなかったのにもいくつか理由があるが、当時は所属していた京都大学文学研究科のスラブ語学スラブ文学専修ではロシア語で博士論文を提出することができず、それまでロシア語で書いてきたものを日本語に訳さなければならなかったということが大きい。様々な偶然が重なったことで良くも悪くも最後まで終えることになった。2020年3月に論文を完成させたにも関わらず、煩瑣な手続きを経て2021年4月末にやっと試問があり、学位記発行の決定が出たのは2021年10月半ばと、論文完成から学位を取得するまで1年半以上かかってしまった。ここまで留学先でお世話になった人は少なくないので、最後まで終えることができてよかった。ちなみに、ロシアと日本の両方で学位を取る人もいる。興味がある人は調べて頂きたい。

最後のメリット・デメリットで若干触れた、ロシアのドストエフスキー研究コミュニティの特徴については、これまで何回か書いた学会報告でも触れたことがあったが、いずれまとめてどこかに記したいと考えている。

余録. 試問のための滞在期間でのコロナウイルスの状況

最後に、試問で滞在していた期間(2021年2月13日～5月6日)のコロナウイルスの状況に

ついて記録しておきたい。アエロフロートの東京モスクワ間は、週に2本飛行機が飛んでいる状況が、国際線が再開した2020年11月から帰国のタイミングまで続いていた。ビザは、3カ月の業務ビザ（文化交流という名目で申請）で渡航した。いつもは簡単に申請できるが、今回は、しっかりした渡航理由を書かなければ許可が降りないと言われた。前述のように、試問用に大学から出るビザ（研究生扱いになるため有料、授業料を払う身分と同じ値段と思われる）も3カ月が最大と言われたが、留学ビザという、イレギュラーもしばしば発生していつ出るか分からないものを用いるよりは、はるかに業務ビザの方が良いと考えた。

滞在先は、いつもはトイレシャワーが共同の Hostel を使っているが、感染を恐れて、今回は避けた。1日1000ルーブルと少しの値段で中心地、地下鉄駅で言うと、プロシャチ・バススターニヤと、チェルヌイシェフスカヤの間にあるホテルに泊った。トイレとシャワー付き、作業用の机椅子もしっかりした個室に滞在することができた（写真16：泊まったホテルの部屋、写真17：泊まったホテルの机）。当時はナヴァーリヌイ関連で、毎週デモが行われていたので、デモが行われない場所の宿にした。



写真16



写真17

日本で、PCR検査を出発72時間以内に行い、陰性の英文証明書を手に入れる必要があった。最初に試みようとした病院では、45000円と言われたが、知り合いに勧められた病院では15000円だった。いずれにせよ高額だが、危うく45000円を払うところだった。

飛行機のサイズはいつもの東京モスクワ間のサイズだが、人がとても少なかった。座ると自分の席から周りに人が見えない。モスクワ行きはロシアの方が日本人含む他の国の人よりも若干多く感じた。

ロシアに到着して宿周辺を歩いた段階から違和感があったが、その理由は路上でマスクをつけていない人が多かったせいであると気づいた。滞在した期間のペテルブルクの1日の感染者数は

大体 700 ～ 1000 人が続いた。人々はなぜかピークを過ぎたと思っていて楽天的だったが、私が帰国してすぐに再び感染が拡大していた。会って話したロシア人の半数程度は、すでにコロナウイルスにかかったと言っていた。1 人亡くなった方もいたが、ドストエフスキー研究者の中にもコロナ感染率は高かった。この状況なのでロシアのコロナウイルスワクチン、スプートニク V を打ちたかったが、到着してすぐに外国人にワクチンを打つのが禁止になったため、諦めた。渡航前の時期は日本ではワクチン接種が始まっていなかった。

人々が楽観視しており規制もかかっていなかったため、あらゆるイベントに制限がかかっている様子がなかった。金土日と、バーは通りに沢山の人がはみ出すほど盛況であった（写真 18：コロナ禍におけるロシアのバー）。雰囲気にも飲まれて、私も 1 週間でコロナを恐れなくなった。多人数での会合や混んでいる飲食店は極力避けたが、指定された待ち合わせ場所が巨大デパートの中だったり、お酒も飲むビュッフェ形式の会食を断れなかったり、危険が続いた。2 週間ほどで、ロシアのやり方が当たり前のように感じるようになり、帰国までその感覚は変わらなかった。ただ、頭のどこかで、ロシアのコロナ対策は甘過ぎる、良くないという感覚もあった。ロシアがこのようなノーガード戦法を採用していなければ、渡航もできていないし、試問の手続きすら再開できていなかったのも、複雑な気持ちが続いた。日本に帰って 3 週間ほどで、ごく一般的に気をつけている日本人の感覚に戻った。



写真 18